

# 医師志望の生徒の意識を高く保つ 「医学部小論文・面接講座」

高い進学実績で知られる海城中学・高等学校では、毎年、相当数の生徒が医学部を志望する。そうした生徒を支援するための試みだが、毎週土曜日の課外に実施されている「医学部小論文・面接講座」だ。単なる入試対策にとどまらず、現代医療の抱える問題点をテーマにディスカッションも行い、医師として生きていく決意を促したり、受験勉強のモチベーションを高めたりしている。その講座に参加させてもらい、講座担当の教員チームの中から3人の先生方に、講座の狙いや概要、効果などについてうかがった。

## 現在医療の問題を見つめることで 医師という職業への決意を固める

「医学部小論文・面接講座」を見せていただきました。まずは、この講座の概要を教えてください。

**林** 医療に関する現実的な問題をテーマに、みんなでディスカッションし、自分の意見を文章にまとめ、発表を行う80分間の課外講座です。入試対策講座の要素を含みながらも、それを超えて、医学部入学後の学びや、医師としての心構えにも資するような、様々な思考のトレーニングを行っています。一般に、学校教育の中で医学や医療の問題を扱うことはありません。そのため、医学生は大学入学後初めて医学の勉強を始めることになり、



社会科教諭 林 敬先生

医学部や医療に対する誤解や不十分な認識を抱いたまま医学部に進学する事も少なくありません。そこで、海城では、医学や医療の現状をきちんと把握した上で、強い決意を持って進学してもらおうとの狙いのもとに、10年前からこの講座を開設しています。

——どんな生徒が受講していますか。

**石塚** 高校2年3学期から始まり、3年3学期まで続く講座のため、最初の

段階では、医学部志望者に加えて、まだ進路を明確にしていけないものの医学部に興味がある生徒が受講しています。

医学部入試では小論文と面接が課されるため、その不安解消のために受講する生徒もいますが、高校生のうちから医療の諸問題を知り、それらについて議論したいと考える生徒もかなりいます。選抜を行ったり、受講を強く勧めたりしませんが、友人の評判やクラブの先輩からの口コミもあって、受講人数は例年40〜60名で安定的に推移しています。本校の医学部志望者のほとんどがこの講座を受講していることから、生徒の間でも肯定的な評価が定着しているのではないのでしょうか。

——講座全体の流れを教えてください。

**村上** 学期ごとに大きなテーマを決めています。高校2年3学期のテーマは



国語科主任 村上 慎一先生

## 簡単に答えが出ない医療の問題を 生徒と教員が一緒に考える

——今回の授業では「小児がんの告知」を扱っていました。この話題を選んだ理由は何かですか。

**林** 「医師・患者関係論」のテーマで望ましい素材と考えました。大人への告知ならば、患者の知る権利と自己決定権を軸に考えればいいのですが、小児がんの場合は、患者である子どもの知る権利と保護者の決定権のバランスが重要になります。医師は双方に配慮しながら対応しなければなりません。授業の中で、子どもにがん告知することとは非常に難しいという意見が出ましたが、もちろん正解があるわけではありませぬ。こうした問題だからこそ、他の受講生や教員の様々な意見を聞きながら、深く考える必要があるのです。

——小児がんの告知を進める医師の新聞記事の紹介のあと、理科の先生が小児がんについて解説していましたね。

**石塚** 医学の基本的な内容は、高校の生物でかなり理解することができます。海城の理科コースでは、高校2年まで生物を必修科目としており、3年次に生物を選択しない生徒でも基本的な生物学の知識と理解を身につけています。今回の解説は、これまで海城で学んだことをベースに、がんの基礎知識が理解できるということを、再認識してほしいという狙いがあります。大人のがんと小児がんの大まかな違いについて生物学的な理解があることによつて、告知という倫理的な課題に関する思考がより深まります。がん研究の現状を伝えるのも理科教員の役割で、医療を支える研究医の世界があることも伝えていきたいと考えています。

——その後、小児がんの告知の是非を巡ってディスカッションとなり、5人の先生方も加わっていました。ディスカッションを取り入れている理由は何ですか。

**村上** 一人で考えを深める時間が必要ですが、様々な人の意見を聞くことも同じくらい大切です。しかも自分より知識を持っている大人ではなく、同年代の仲間の発言を聞くことで、より大きな気づきにつながっていきます。この授業には、社会科2名、国語科2名、理科1名の教員が参加していますが、ディスカッションでは、教員も生徒と同じ目線に立つて議論に参加しています。もちろん人生経験が長い分だけ知識は蓄積していますが、テーマがテーマなだけ

に、明確な意見を述べることができないうことも、言いよどむこともあります。しかし、それでいいのだと考えています。それだけ課題が多様な観点から考察されなければならぬことを示しているからです。教員の発言が偏らないように調整しますが、基本的に教員も「市民」として意見を述べ、それをみんなが考えていこうというスタンスなのです。

## 教員の教科を超えた連携が 質の高い講座を可能に 個別トピックスを考える

——最後に、社会科の先生が授業をまとめていましたが、どのようなことを意識してまとめを行なっているのですか。

**林** 具体的なトピックスに即して考えることは、受講生にとつては難しいことではありません。しかし、個別トピックスの底流に何があるのかを伝えなければ、理解は深まっていきません。今回の授業では「小児がんの告知」を、前回の授業では「ホスピス」を扱いました。いずれも、医師・患者関係の大きな変化をふまえて捉えることのできる問題です。個々のトピックスの裏により大きな課題があることを常に意識できれば、新しいテーマやトピックスを考えるとときの有効な視点になります。そこで、授業の仕上げにまとめを行なうことで、底流のテーマを再確認できるようにしています。

す。また、授業の最後に「おみやげプリント」を配布します。授業時間内では、どうしても扱える資料は限られてしまっています。そのため、関連分野や事項の幅広い内容を伝えられる資料を、普段の勉強の負担にならない程度の分量にまとめて受講生に配布しています。

——5人の先生方の役割分担はどのような形になっていますか。

**石塚** 医療をめぐる社会的な背景や、個別のトピックスやテーマの解説は、社会科の教員が担当します。国語科の教員は、小論文の執筆指導を担当します。理科の教員は、医学の科学的な側面の解説を担当します。今回の「医師・患者関係論」であれば、強い立場にある医師が患者のためだと、病状の伝達から治療法の選択まで主導的に医療行為を行ってきた「パターナリズム」や、そこからの脱却を目指した「インフォームドコンセント」などの概念の解説は社会科が担当し、がんの生物学的なメカニズムの解説は理科が担当しました。こうした連携によつて、つのテーマや



理科科教諭 石塚 泰啓先生





トピックスを重層的に捉えることができるのです。

**林** 本講座と同様の小論文講座を実施している予備校もありますが、講師が一人で担当することが多いようです。しかし、本校ではそうした無理をせず、複数の教科で分担することで、教員相互の学び合いも広がっています。この学び合いは、それぞれの専門教科の授業の向上にも間接的に役立っています。教科横断型のコラボレーションだからこそ可能になった講座であり、本校全体の教育力の向上にも貢献していると思います。

——小論文指導は、具体的にどのような形で進んでいるのですか。

**村上** 各学期のまとめとして、その学期に扱ったテーマに関する小論文を執筆してもらいます。そこには、これまでのディスカッションや自分の意見が反映されています。提出された小論文は、



添削して本人に返しますが、3〜4名の生徒をピックアップして、その小論文をワープロでタイプアップして、みんなで読んでいます。仲間の書いた小論文について、論の進め方や書き方、内容などについてディスカッションを行うわけです。また、ピックアップした小論文については、国語科の教員が、生徒の文章を引用しながら、具体的な書き直し例も提示します。通常ならば、教員と生徒の「対」の関係で終わることの多い小論文指導ですが、一部を公開指導の形にすることで、より多くのことを学べるように工夫しています。このプロセスを経た上で、もう一度書き直しをさせ、表現力の向上や内容の進化につなげていきます。

**良くなるまでは何度でも…  
入試本番より厳しい模擬面接**

——通常の講座の間に、特別企画が入ることがあると聞いています。

**石塚** 医学部に進学した卒業生に参加してもらっています。研修医や研修医を終えた20歳代の駆け出しの医師に、議論の輪の中に入ってもらいます。彼らはまさに医療の真っただ中で格闘していますから、発言には実感が伴っており、それなりの重みがあります。そうした現場の視点からの意見だけでなく、現在の仕事内容や、受験当時の学習や生活についても話してもらいます。研修医の生活は本当に忙しく、徹夜明

けで駆けつけてくれたり、講座が終わるとすぐに病院に戻ったりという生活の中で参加してくれることもわかります。研修医の苦勞も目の当たりにしますから、医師に対して変な幻想を抱かなくなるという点でも、卒業生を呼ぶ特別企画は有意義だと考えています。

**林** ある卒業生が「国公立大学の医学部でセンター試験の配点が高い理由が、医師になって初めてわかった」と話してくれました。その理由は、医師は基本的に大部分では絶対にミスができないので、どんな分野でも基礎的なことは絶対に押さえないければならず、それがセンター試験重視につながっているというのです。こうした経験談は我々教員にとっても新鮮で、生徒を指導する上で大いに参考になります。

——3年の3学期に行なわれる模擬面接は、具体的にどのような形で進められるのですか。

**石塚** 医学部入試では面接が課されるため、ほとんどの生徒が模擬面接を受講します。実際の入試と同じように、校内の応接室を使って1人当たり15〜20分程度、教員2〜3人が対面する形で面接を行います。入室から退室まで本番同様の雰囲気をつくり、質問内容も、出願する大学の出題傾向に合わせたものになっています。面接が終了、40〜50分くらいかけて、振り返りを行います。入室時の態度から、質問に対する受け答えなどを厳しくチェック

クします。ビデオカメラで面接風景を撮影して、生徒と一緒に見ながら指導することもあります。この振り返りが指導の最大のポイントで、何が足りないのか、どこが悪いのかを理解させ、どうすればそれを改善できるのか、具体的に指摘します。数日後、もう一度模擬面接を行い、その改善点がクリアできているかを確認します。改善が見られなければ、同じことを繰り返します。かつて4回受けた生徒もいますが、どの卒業生も「これにこの模擬面接の方が、本番入試よりも厳しかった」と言います。だからこそ、入試本番で最高のパフォーマンスを提示できるのだと思っています。

**国公立大学医学部の合格者数は  
関東でトップクラスの実績**

——この講座の効果をどのように考えていますか。また、卒業生や在校生の反応はいかがですか。

**林** 講座を通して、医学や医療について、独自の考え方を練り上げていく機会があるというのは、やがて医師になる生徒にとって、大きな意味があります。医学部に合格すれば、受験勉強だけに終始してきた他校の生徒と同じスタートラインに立つわけですが、海城の卒業生は「同級生に対してアドバンテージを持つて第二歩を歩むことができた」と話してくれました。

**石塚** 同じ志を持つ者同士が、自分た

ちが関わることになる医療の諸問題について議論することで、モチベーションの維持や向上につながっています。志望動機の再確認や、地道な系統学習を続ける上で、この仲間存在は大きいと思います。

**村上** 実際には、医学部を目指しているのに、医療の実情や理学的な知識が不足している生徒もいます。この講座が、そうした生徒には、かなり役に立っているはずですが、独自の視点から色々と考えている生徒がいることが、この講座を受講すればすぐに分かりますから、「これではいけない」と意識を高める上でも効果的です。

——この講座は、入試に好影響を及ぼしているのでしょうか。

**林** 今年度の入試結果では、国公立大学医学部の合格者数42名と卒業生の10%を超え、関東ではトップクラスです。私立大学医学部の合格者数も2年連続で100名前後です。その背景には、医学部志望者の増加があげられます。理科コースの生徒の3分の1弱が医学部志望で、受験するのは家の事情や成績などの条件もあつて4分の1強まで減少しますが、それでも多いと思います。社会科学総合学習にも力を入れる本校では、中学3年間で、生徒は取材を伴うレポートを9本もまとめます。その際に、多くの生徒が医療をテーマにして、現場で様々な課題に立ち向かっている医師に取材を申し込

みます。かけがえのない生命を救うことで社会に貢献する、そうした医師の生き方に心打たれた生徒たちが真摯に努力してきた結果が、高い進学実績につながっていると受け止めています。この講座は、そうした生徒たちを応援する取り組みの一つなのです。\*既卒生含む

——最後に、この講座の意義や今後の抱負についてお話をください。

**石塚** 基本的に答えのない問題を考える時間ですから、まずは未熟な考えでもいいんだと気づいてくれればと思います。本講座は、生徒のそういう気づきの場として機能しています。

**村上** この講座の小論文も、最初は添削していただけていますが、やがて社会科や理科の教員からコメントが寄せられたり、内容に関する解説が入ったり、小論文の書き直しなどが加わったりと、どんどん進化しています。これからの進化を続けながら、生徒を支える存在であり続けたいと思います。

**林** 一般に、進学校の講習は、ともすれば教科教育を強化する方向に向かいがちです。しかし、海城の「医学部小論文・面接講座」は、教養や知的好奇心を高めることを志向しています。もちろん生徒には受験に有利だろうという意識はあるでしょうが、受講生を見ていると、より大きなものに向かって行こうとする意欲を感じます。今後も、そうした生徒たちと一緒に学んでいきたいと考えています。

**発想力や視点を  
広げられる魅力**



内田隼人くん(高3生)

小論文対策というより、医師になる上での重要だと思って受講しています。教材の新聞記事について人の意見を聞くと、斬新な視点だったり、常識だと思っていたことが覆されたりと、非常に刺激的です。自分になかった着眼点を得ることもでき、発想力やものの見方を広げることができ、この講座を受けたことで、診療技術だけでなく、患者とその家族を考える人間性の重要性が理解できたので、勉強以外にも気を配るようにしたいと思っています。

**様々な情報に  
触れられる利点**



深井諒くん(高3生)

進路で迷っていたため、医師になるとはということかを考えたためを受講しました。多様な新聞記事を資料としてもらえるので、多くの医師の死生観や、患者に対する姿勢を学べる点が大きなメリットだと思います。おかげで、医師は病気を治療するだけでなく、患者との信頼関係を築いていく仕事だと理解することができました。患者さんの生活を丸ごと支えられるような、プライマリーケアのしっかりできる医師を目指したいと思っています。

**自分なりの医師像を  
構築できた**



後藤崇くん(高3生)

社会科の先生が問題点を掘り下げ、理科の先生が先端医療を解説し、国語科の先生が文章を添削するといったように、いろいろな教科の先生がサポートしてくれるため、医療問題を幅広い視野から捉えることができるようになります。その結果、将来は、小児科医か外科医という自分なりの医師像を構築することができました。毎回授業を受けるたびに、医師志望であることを強く自覚することができ、またこの一週間大変だけど勉強をがんばろうという気になります。